



ターリム地域の住民 (Die Bewohner des Tarim-Gebietes in vor-uirgischer Zeit)」「<sup>1)</sup>高昌のウイグル王国 (Das uigurische Königreich von Chotscho)」「結語」註から成つてゐる。

「序論」は、(1)「地形 (Topographie)」、(2)「トウルファンへの諸探検隊、三つの文化期 (Die Turfanexpeditionen: drei Kulturepochen)」に分れるが、まず、(1)において、ターリム盆地を中心とする東トルキスタンの地形が略述せられ、ついで、ここでは個々のオアシスを中心に独自の文化が栄え、それらを東西に連ねる三本の交通路が存在して、東トルキスタン内部にあつても文化・文物の交換に役立つたが、これら諸オアシスを包括する大國は形成されなかつたこと、つづいて、カラハン朝の進出によつて全地域の言語的チュルク化がはじまり、さらにそれがモンゴル帝國の支配によつておしよめられたことなどが指摘され、最後に、今日の東トルキスタンは人種的には複雑であるが、言語的にはほぼ東部チュルク方言(「新」ウイグル語)に統一されていることがのべられている。(2)では、まずロシア・プロシアなどのトウルファン探検隊によつて発見・將來された東トルキスタンにおける前イスラーム期の遺跡、遺物の大体を紹介し、ついで、この地域の文化期を、(a)インドーヘレニスティク(ガンダーラ)期(約紀元六〇〇年まで。和闐を中心とす)、(b)いわゆる「トハラ」期(龜茲を中心とす)、(c)チュルク・シナ期(紀元八〇〇年以後。高昌を中心とす)に区分するワルトシュミット(Waldschmidt,

E.)の説をあげ、さらに、前イスラーム期にこの地域で用いられていたさまざまな文字・言語の種類、および宗教についてのべ、その文化的多様性を指摘している。本書の対象とするのは、上述の三文化期のうち、(c)チュルク・シナ期における高昌のウイグル王国にほかならぬ。

この「序論」につづいて、(一)では、「ウイグル以前の時代におけるターリム盆地の住民」として、(1)インドゲルマン人(インド人・サカ人・ソグド人、「トハラ」人)、(2)シリア人、(3)シナ人、(4)チベット人、(5)モンゴル人(主にチンギス・ハン帝國以後)をあげ、それぞれについて、その主たる居住地域、略史、言語、文書の種類そのほかに關してのべ、最後に、東トルキスタンへ移動する以前における(6)チュルク人(突厥・鉄勒[Türk])の歴史をきつと願みている。

以上紹介した「序論」と(一)とが本書の導入部とすれば、(二)「高昌のウイグル王国」は、その本論をなしている。ここでは、ウイグルの主流はトウルファンへ移動して、その都市文化に順応していつたが、それ以前、その地域には、バスマル・チュルクギシュなどのチュルク人、ソグド人、シナ人、「トハラ」人、サカ人、シリア人が住んでいたことが指摘され、ついで、(1)「國家組織 (Das Staatswesen)」に關して、ほぼ以下の如く論ずる。

ウイグルが高昌移動後たてた國家は、もはや帝國 (Imperium)ではなく、王国 (Königreich)であつたが、それは、シナやチベットから大した掣肘をうけなかつたためもあつて *töra* と呼ば

れる一種の慣習法を中心として、割合よく秩序づけられていた。その支配者 (Herrscher) は、鮮卑以来(と著者は考える)、突厥、ウイグル草原帝国で用いられてきた *kayan* の称号 (Titel) にならんで、言語的にもイデー的にもチュルク的な *hig* (ハヒグ)、「部族もつるもの」) *kan* および *idagut* (ハダグウト)「聖列に加えられたるカリスマ(Charisma)」の称号を使うに至つた。支配者は、その位をしめす (Instigation) ために、祭祀にあつては、壮麗華美な壇、玉座に座し、*didim* (ハマニ教中世イラン語「兜、花冠、王冠」ハギリシア語) と称せられる背の高い黄金冠をいただき、赤い外衣を羽織つた。かれらウイグルは、その帝国時代から、一支配者に宿り、または一地域に恵みを垂れる *gut* (カリスマ、守護霊) の存在を信じていたが、王国時代になつてもその信仰はつづき、マニ教で守護霊をしめす *vastik* の語によつてそれが表現されることもあつた。ところで、古代ペルシアにおいて俗世の支配者に対する称号であつた「王中の王」は、チュルク人にあつては「神中の神」という形で、仏陀に対して用いられるに至つた。これなどからも知れるように、チュルクウイグルでは、「俗界と超俗界との結びつき (weltlich-geistliche Beziehungen)」が信じられていたのであるが、このことはまた、経典を写して寄進することによつて、*puuva* (宗教的功德) が獲られると考えられていた点にもあらわれている。すなわち、仏教、マニ教に拘わりなく、経文の終りに施主の奥書きがあることが多いが、その中で、その功德が、ま

ず第一に支配者一族におよび、そのあとではじめて、すでに歿した自分の親族、ついで生存中の一族郎党、友人たちにもよぶことが祈願されている。これらの中に我々は、摂理の力——一定の人物に全国家組織の「幸 (*gut*)」と全民衆の福祉とを保証する——と支配者が結びついているという信仰、したがつて支配者のもつカリスマへの信仰、つまり、高貴のものと卑賤のものとの間に快く調和のとれた秩序が存在するという信仰を認めうるであらう。

大略以上の如きことを論じた(1)「国家組織」につづいて、叙述は、ウイグルの絵画にあらわれた、特に異民族を描写する際の(2)「歴史化と類型化、異民族 (Historisieren und Typisieren; die Fremden)」の問題にうつる。すなわち、高昌のチュルク (ウイグル) —シナ期に先立つ文化期、つまり龜茲の「トハラ」期の絵画にあつては、(a)「トハラ」人以外の異民族、例えばインド人を表現するに当つて、かれらの容貌の人種の特長を強調する、いわば「類型化」と、(b)遠い過去のインドの騎士をあらわす際に、「トハラ」人が伝承的に古代騎士的とうけとつていたササン朝的な風装、道具だてのもとに描く、いわば「歴史化」、この二つの手法がとられたが、これが二つとも、ウイグルの絵画に継承され、そこで展開されたことを、トゥルファン発見の、「誓い (Pranidhi)」の光景を描いた多くの絵画の実例によつて詳しく論じ、あわせて、ウイグル王国における異民族の役割に触れている。ところで、それ以外の仏教絵画の中には、信者たる施主の像の

脇に銘文が書かれていることが多いが、それがウイグル文字、チュルク語、チュルク名であれば、その施主は、確かにチュルクウイグル人である。したがって我々は、その人物像から、ほかならぬチュルクウイグル人の服装——多くの場合、晴着——が如何なるものであつたかを推定しうるであらう。著者はこういう論拠から確実に(3)「ウイグル人の服装 (Trachten der Uiguren)」と目されるものを、(a)「男性の服装 (俗人。四種類)」、(b)「女性の服装 (俗人。五種類)」、(c)「特殊の服装 (仏教・マニ教の僧尼、太刀持ち、狩人、画家そのほか)」に分け、それぞれについて、多くの実例をしめしつつ、検討している。

さて、先にも指摘されたように、ウイグル人は、「トハラ」絵画においてすでに存在していた「歴史化」、「類型化」の手法を継承して展開させたが、ウイグルの絵画には、さらにこれらのほかに、以前の絵画には見られぬ特長が幾つか存在した。その一つは、各人物の個性をはつきり捉え表現する(4)「肖せて描く (Porträtieren)」技術の発展である。これは、その功德が、ほかの誰でもないまさにその特定の人物におよぶためには、その人物の個性を明瞭にあらわした肖像を、かれの名前・称号などとともに描かねばならなかつたからである。そしてこのいわば「個性化 (Individualisierung)」への動きは、すでに突厥や古代ウイグルにあつて、いわゆる「永遠に伝える石 (bängü mähgü)」つまり英雄の記念碑上に、その死せる英雄の名前・称号または官職・年令が常に刻される点に萌芽をみせているが、これは、「意識面における」

「個性的思考への発展 (eine Entwicklung zu individuellem Denken)」をしめすものである。ウイグル絵画の特長は、「しかし、これに止まらぬ。すなわち、構図からいうと、「トハラ」の壁画では、一つまたはそれ以上の物語りのこまかいシーンが数多く詰めて描かれているが、ウイグルのそれでは、線の太い、簡素な構図が好まれ、色彩的には、前者の紺青色・明緑色に対して、後者では赤褐色が多く使われ、またテーマについていえば、前者の「血なまぐさい殉教物語り」に対して、後者では「崇高な仏陀」が描かれているが如くである。

著者はウイグルの絵画にみえる人物像を材料としてほぼ以上のように論じてから、つぎに、高昌のウイグル王国における(5)「物質文化 (materielle Kultur)」を、(a)「馬の飼養 (Pferdezucht)」、(b)「農業 (Landwirtschaft)」、(c)「鷹狩 (Falkenbeize)」、(d)「住居 (Wohnung)」に分け、それぞれについて、これまたウイグル絵画の実例を数多くあげて略述しているが、中でも、住居の外面・構造・屋根・裝飾などについては、割合詳しい叙述が与えられている。

以上紹介してきた(1)「高昌のウイグル王国」のうちの(2)「歴史化と類型化、異民族」、(3)「ウイグル人の服装」、(4)「肖せて描くこと」、(5)「物質文化」の各節は、何れもウイグルの絵画を主要な材料としているが、これらについて(6)「物を書く文化 (Schreibkultur)」、(7)「諸宗教 (Religionen)」、(8)「言語の発展 (Sprachentwicklung)」、(9)「文献 (Literatur)」の叙述は、ちぎりにあげた(1)「国家組織」

のそれと同じく、主に、文献資料に基づいている。すなわち、(6)「物を書く文化」では、用紙の種類、書物の体裁、印刷技術、書く用具そのほかに触れたあとで、それに用いられた文字の種類として、(a)いわゆる「ルーン文字」(Runen-schrift、突厥文字) (比較的古い。マニ教テキスト・世俗文書)、(b)ソグド文字 (比較的古い。仏教テキスト)、(c)いわゆる「ウイグル文字」(ungurische Schrift) (すべての種類の文書)、(d)エストラングエロ文字 (キリスト教テキスト)、(e)マニ教文字(マニ教テキスト)、(f)ブラーフミー文字(仏教テキスト)、(g)チャベット文字をあげて、各々について簡単な説明を加え、(7)「諸宗教」では、ウイグルのもとで行われた宗教、仏教・マニ教について概観し、「ブライク(Braik)を中心としていた王国内の少数チュルク人キリスト教徒中に、ウイグル人もいたかどうかは確実でない」といつて、この節を終っている。

このような宗教の説く複雑な内容の適確な表現は、いうまでもなく「言語の発展」を前提とする。このことを、多くの例をあげて略述したのが(8)節である。一例をあげると、いわゆる「突厥文字碑文」におけるチュルク語は「集団的意識(Kollektivbewusstsein)」の段階にあつて型も整つていず(formarm)その文章は半孤立的な句をただ並列させたにすぎぬのであるが、ウイグル語になると、各文章要素間に「調和のとれた構文」が生まれ、また「過去」と「大過去」、「行為」と「状態」、「完了」と「継続している結果」などが、副詞にたよらず、ただ時称形だけで区別され、さらに、種々の修辭法が用いられるに至つたが如くである。

## 批評と紹介 護

amx をつぎつぎに附加することによつて新しい単語ができたため、チュルク語の語彙も増えたが、そのほかに、特に宗教的な術語には、シナ語・サンスクリット語・イラン語からの直接的・間接的な借用語が使われた。

著者は、ウイグル語におけるチュルク語の発展について、ほば以上の如きことをのべてから、(9)「文献」の節で、まず、仏教・マニ教・キリスト教に関する諸文献の性格や内容、種類について大観して、附加的に、それらの文献の中には、楽器の伴奏や舞踊とともに朗吟されたものや、演劇の台本に類するものもあつたことを指摘し、最後に、「結語」を附して、この書を終つている。

以上、本書の大筋だけを、ざつと辿つてきたにすぎぬのであるが、この蕪雑な紹介によつてもほば察せられるであろう如く、本書は、その題名から想像されるような「高昌のウイグル王国(八五〇—一二五〇年)の全般を扱つたものではない。すなわち、本書で著者が特に力を注いでいる箇所は、(一)「高昌のウイグル王国」、中でも特に、その(2)「歴史化と類型化、異民族」、(3)「ウイグル人の服装」、(4)「肖せて描くこと」、(5)「物質文化」にある。これら各節において、トゥルファン発見の絵画に実例をとりつつ行われた分析、展開せられた議論には、女性らしいこまかい神経がゆきとどいていて、我々を納得せしめるものが多い。

これに対して、上の各節に先立つ「序論」、(一)「ウイグル以前の時代におけるターリム盆地の住民」は、従来の諸学説の要約、紹

介であつて、ヨーロッパにおける通説の概要を知る便宜は与えてくれるが、我國の学界の水準からみて、如何かと思われる点もなではない。つぎに、(二)「高昌のウイグル王国」の(1)「國家組織」にも、著者の創見が随所にみられるが、これも、高昌ウイグル王国の國家組織について、可能なるかぎり、すべてを論じつくしたものはいい難い。何となれば、第一に、ただウイグル文書だけに拠つて考察しても、例えば官僚組織など、問題となりうることはまだまだ多いし、第二に、この時代のウイグル王国に関するシナ史料は、決して多いとはいへぬが、さりとて、著者の断言する如く「不毛 (unergiebig)」ではないからである。ウイグル文書は勿論、シナ史料でも造詣深い著者が、これらを網羅的に駆使し、さらに絵画そのほか実物資料をも斟酌して論ぜられたならば、ウイグル王国の國家組織は、もつとけつきりしたかたちで、我々の前に姿をあらわしたであらう。

つぎに、(三)「高昌のウイグル王国」の後半、(四)「物を書く文化」、(七)「諸宗教」、(八)「言語の發展」、(九)「文献」の各節について、これは、著者の過去四〇年にわたる苦心の研究の結果、ようやく獲得せられた尊貴成果の集大成である。すなわち、これらの各節は、著者がかく「それぞれ独立の論文として發表された例として、*Türkische Turfantexte I-X; Altürkische Grammatik; Steppe und Stadt im Leben der ältesten Türken; Altürkisches Schrifttum; Die Pronomina im Altürkischen; Über Ortsbezeichnungen im Altürkischen; Zur*

*Geschichte der türkischen Vokalharmonie; Inhalt und magische Bedeutung der altürkischen Inschriften; Buddhistische Türkenmission; Altürkische Datierungsformen; Mairismit I-II; Das Altürkische*」そのほかの結論に、ヨーロッパにおける最近の研究成果を加え、僅か七頁のなかに煮つめたものであつて、その一語一句が、実に深い内容をもつてゐる。これら各節の叙述の表面にはみあらわれたところだけからは、その奥に秘められた真意がたちには理解しかねる場合もあり、いまだ少し詳しくのべられていたら、と思ふのは、評者の浅学のいたすところでもあらうか。

くりかえしいうなら、本書の眼目は、何といつても、ウイグルの絵画を中心として論ぜられた箇所であり、これは、本誌前号に評者が訳出した「ウイグル王国における品位ある姿勢」とともに、著者が構想される「ウイグル王国文化史」の一端をなすものであらう。

——一九六二・一一・二八——

(Von GABAIN, Annemarie: Das uigurische Königreich von Chotscho 850~1250. Sitzungsberichte der deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, Klasse für Sprachen, Literatur und Kunst, Jahrgang 1961 Nr. 5, Berlin, 1961. 81 S. 42 Abbildungen.)